



Title	Session2. 冬眠、仔の生存および繁殖
Author(s)	坪田, 敏男
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 7
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91571
Type	report
File Information	session2.pdf



[Instructions for use](#)

SESSION II. Denning, Cubs and Reproduction

冬眠、仔の生存および繁殖

坪 田 敏 男

8題中、冬眠生態についてが4題、0歳仔の死亡に関するものが3題、そして繁殖についてが1題であった。繁殖については、ホッキョクグマとナマケグマの出産シーンがビデオで紹介され、貴重な映像を皆身を乗りだして拝見した。

冬眠生態についての発表4題のうち3題がアメリカクロクマ、1題がヒグマを対象としたものである。内容は冬眠に入る時期、または覚醒時期と年齢・性・仔の有無との関係、冬眠中のクマの体温の変化および冬眠穴の位置や形態など生物学的な考察に加えて、冬眠に必要な環境と人間による開発との関係について述べ、保護管理の話につなげているものが多かった。中でもある発表では、人家や道路のわずか数百メートルから数十メートルの地点に冬眠穴が発見されたと述べ、逆にいえばそれだけ人間側がクマの生息域に踏み入れているといえ、彼らの生活を脅かしていると報告者は考えている。彼らの生活史の中でも重要な位置を占めると考えられる冬眠のための環境を確保することは、クマの保護管理を考える上で大事な項目の一つであろう。

0歳仔の死亡について述べた発表の中で興味をひいたものとして、0歳仔の死亡原因を追求するためラジオトラッキング法で0歳仔を追跡し、生存・死亡の確認を行ったという研究報告があった。そのおもしろい点として、一つにはアメリカではラジオトラッキング法が既に常法のように使われており、単に行動範囲を求めたり個体間の関係をみるためだけでなく、より広い分野に応用して使われていることを物語っている点であり、もう一つは、この研究結果では8頭の0歳仔の死因のうちその半数は他のクマによる捕食で、その他には飢餓、病気および狩猟によるものであったという点である。ここで北海道について考えてみると、毎年0歳仔連れの親仔がけっこう捕獲されている。もし北海道でこれと同じ調査を行ったとすると、0歳仔の死因として何が1番目になるのか非常に興味あるところである。

繁殖に関する研究は元来少ない。これだけラジオトラッキングが普及しているのだから繁殖期における個体間関係などの研究が行われてもいいと思うのであるが。